

◎小学生の部

太田玉茗賞

ぼくたちの新二小

新郷第二小学校三年

塚田 聖悟

お母さんに見せてもらった古い写真
後ろの列、右から二番目の子が
子どものころのお母さん
ぼくと同じ三年生

後ろに写っているのが
昔の新郷第二小学校
屋根はかわらで、かべは木で
小さくてかわいい校舎

「ろう下もかいだんも木でできていたの。
長いろう下を一行にならんで
きょうそうしながらみがいたよ。」

「教室の時計は、はしら時計。
ねじをまいて動かすの。
ねじまき当番もあったのよ。」

子どものころのことを話す時、
お母さんはとても楽しそう
昔って、なんだかおもしろい
タイムマシーンにのって
昔の新二小に行ってみたい

今はりっぱなてっきんの校舎
理科室、図工室、家庭科室：
コンピューター室だっている
校庭もずっと広くなってる
おにごっこやサッカーで思いっきり
走り回れる

学校がすっかりかわっても
かわらないものもあるんだね
それは、子どもが元気なこと
毎日、学校が楽しいこと
みんな新二小が大すきだっていること

優秀賞

ふるさとの音

村君小学校五年

大谷 夕姫

「ブツブツブウーパッチン」
これは
ばあちゃんがミシンをかけて
糸を切った音
私が生まれた時から
ずっと聞こえて来る音

ピンクの前かけに
真っ白なエプロン
昔は園服もぬっていたんだって
みんな ふだん使っている物ばかり

「ばあちゃん これを作ってよ」
たまたま私もリクエスト
習字道具入れや
ピアノの本を入れるバック

ばあちゃんがぬってくれた物
みんな 私のお気に入りに入り
「ブツブツブウーパッチン」
今も聞こえる
あの音色

私も
大きくなったら
上手にぬえるかな
今度 教えてね
ばあちゃん

お帰りなさい

新郷第二小学校五年

小澤 由衣花

八月十三日のお昼すぎ

おじさん、おばさん、家族。

そして、私

みんなでお仏だんをきれいにしました。

ほこりをはらって、ていねいにみがいて、

すみずみまできれいにしました。

竹のささを立ててなわでしばって

赤くそまつたほうずきをぶらさげた。

緑とだいたい色がとてもきれいだった。

おばさんが色紙の切り方を教えてくれた。

一生けん命まねて、私も切ってみた。

私の切った色紙をなわにかざると、

お仏だんがパツとあざやかにになった。

一年に一度、ご先祖様がわが家に帰って来る。

お盆がやって来た。

みんなでおはかまでご先祖様をおむかえに

行った。

かとり線こうのともし火と共に

ご先祖様が「わが家」に帰って来た。

「お帰りなさい。」

みんなでお線こうをあげて

ご先祖様をおむかえした。

いつもみんなを、そして私を

見守ってくれてありがとう。

今年のかざりつけ気に入ってくれたかなあ。

おじいちゃん、おばあちゃん

「お帰りなさい。」

中川

羽生北小学校六年

肥後 侑樹

源は埼玉県羽生市。

住宅街の目立たない所にある。

エイツと飛び越えられそうなくらい

川幅は狭く、草が生い茂っていた。

埼玉東部の田園地帯を ゆるやかに流れ、

いくつもの川と混じりながら、

ぼくのいとこの住む町を通り、

とても広い川に成長して

都会を右手に見ながら東京湾に流れ出る。

水辺には、鳥や昆虫や、

かつては あざらしまでもがやって来て、

安らぎを求めていく。

しかし、ある時は荒れ狂ったようにうねり

茶色くにごった水は、流域の人をおびやかし、

恐ろしい存在となる。

ぼくも この川のように

最初は ちっぽけな存在だけど、

様々なものと関わり合いながら

まわりの人を笑わせたり、

時には悲しませたり、怒らせたりしながら

ゆつくりと、けれども確実に成長し、

都会を通って世界という大きな海に

出て行くのだろうか。

源は埼玉県羽生市。

ぼくの大人への旅立ちが、ここから始まる。

佳作

わたしとサケ

新郷第一小学校三年

池澤 萌々香

小さな赤いたまご
学校でもらった赤いたまご
たまごの中には目が見える
みんなに早く会えますように
毎日、毎日気になって
毎日、毎日ながめてた
一ぴき、二ひき、かえったよ
三ぴき、四ひき、泳いだよ
みんな大きくなりますように
元気にすくすく大きくなって
スイスイスイって泳いでる
体のもようもしっかりついて
別れのときが近づいた

ほう流の日
とてもさみしかった
なみだが出てきた
だけど小さくせまい水そうで
泳いでいるより楽しそう
大きく広い利根川で
泳ぐサケは楽しそう
今よりずっと大きくなって
ふるさと、利根川に
もどってくるのをまっている
わたしも今より大きくなって
ふるさと、羽生でまっている
また会おうね

小さなぼうけん

新郷第二小学校二年

柿沼 克彦

夏のある日の夕がた、
おとうさんとさん歩にでかけた。
おとうさんは歩くのが早い。
ぼくは、おとうさんのあとを歩く。
どんどんはなれていく。
ぼくは、おとうさんにおいつこうと、
いっしょうけんめいに歩く。
ぼくのかげもいっしょに歩く。
とんぼやちようたちもいっしょになって歩く。
おとうさんがきゆうに立ちどまる。
「あの大きなはっぱはなんのやさいでしょ。」
とゆびをさす。
ぼくはわからない。
「さともだよ。」
とおとうさんが教えてくれる。
「このやさいはなんでしよう。」
とまた聞かれる。

ぼくがわからないと、おとうさんが教えてくれる。
わかるとすぐ楽しくなる。
べんきょうになる。

歩くのは気もちがいい。
すずしい風が気もちがいい。
いろんな人と出会う。
いろんなけしきと出会う。
気もちがいい。
ぼくは、あるくのが大すきだ。
せまいみち、
じやりや草だらけのみち、
車ではしれないみち、
みちがないみち、
どんなところでも歩きなら行ける。
ぼくのしらないみち、
ぼくの小さなぼうけんだ。

やさしいほほ笑み

須影小学校六年

亀山 莉奈

私の家のすぐそばにいらっしやる小さなお地蔵様。

それはそれは小さいお家の中に仲良く二体並んでいる。

すぐそばを通っても気が付かないくらい的小さなお地蔵様。

でも私が生まれるずっと前、おじいちゃんやおばあちゃんがうんと若いころから変わらずそこにいらっしやっただって。

そんなお地蔵様も一年に一度みんなのアイドルになる日がある。

田んぼのいなほが一斉に頭を下げるころ「お地蔵様の日」はやってくる。

その日はきれいにしてもらってみんなに手を合わせてもらって。

お団子をもらって帰る人の顔はにこにこ。それを見送るお地蔵様のお顔はいつもより

ほほ笑んでいるように見えた。

今日もお地蔵様はそこにいて私たちを見守ってくれている。やさしいほほ笑みをうかべて。

グラランパの畑

羽生北小学校六年

島田 佳与子

せみの声
土のおい
深く美しい田の緑
そしてそこに
麦わらぼうしをかぶった
グラランパがいる。

夏のグラランパの畑には
ぶらぶらさがって
楽しそうな深緑のきゅうり
シックな紫のおしゃれなナス
赤、黄色、オレンジのあざやかなパプリカ
黄色くてあまいぼくぼくかぼちゃ
ごろんごろんと集まって
あまさまんしているスイカ
緑、紫、赤、黄色、オレンジ…
カラーあふれる
グラランパの畑は
宝石がちりばめられている

私は大好き
グラランパの作る野菜が

家族が健康でいられるのは
グラランパの畑のものを
たくさん食べられるから

家族が笑っていられるのは
みんなが感謝して
食事しているから
畑がつなぐ私の家族

太陽と大地のめぐみを受けて
私の心にパワーがみなぎる

ありがとうグラランパ。

あだたら高原少年自然の家

手子林小学校五年

中島 美沙樹

今年で最後の林間学校

わくわくしながら バスに乗った

大自然の中にある あだたら高原少年自然の家

ひんやり 空気が とってもきれい

夜には みんなでキャンプファイヤー

まわりで 楽しく おどったダンス

ほのおの中の みんなのたくさんの笑顔

わすれない

はじめて登った あだたら山

険しい山道 たくさんあつた

山ちようから見た すばらしい景色

大きく広がる大自然に 心がどきどきふるえた

つかれて食べた おべん当

なんだかとっても おいしかった

みんなでのぼった あだたら山

この時感じた気持ち

わすれない

三十五年も続いた

あだたら高原少年自然の家

わたしたちの心の中にたくさんの思い出

わすれない

さようなら あだたら高原少年自然の家

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
サケのふるさと	新郷第一小学校 四年	飯田 健太郎
百万遍	須影小学校 五年	石井 幸乃
かぼちやのくりぼう	須影小学校 六年	生方 涼
となりの竹やぶ	新郷第二小学校 二年	漆原 幹人
私の家の庭の木	新郷第一小学校 六年	高野 汐央莉
安達太良山	手子林小学校 五年	鈴木 涼介
夏祭り	羽生北小学校 六年	滝澤 直起
ぼくのさんぽみち	新郷第二小学校 一年	堤 莉穂
生きているふるさと	新郷第一小学校 六年	原口 桃花
わくぐりの歌	須影小学校 四年	藤原 一成
私の大切な朝	新郷第一小学校 六年	渡邊 南帆

◎中学生の部

太田玉茗賞

ふるさとの風

西中学校三年

小野寺 咲郁

ぬけるように青い空が
季節が変わったことを告げる
風が町を駆け抜けて
夏の香りを運んでくる
どこかでせみの声が聞こえたかと思えば
鉄橋を渡る電車の音も聞こえてくる
いつもの風景
いつもの音に包まれ
いつも一緒に暮らしているこの町に
ふと疑問を抱いた

—なぜ日々の繰り返し
こんなにも楽しさに満ちているのだろう

通りすがりの風に問えば
風は
何も言わず頬を撫で
わたしのまわりを漂って
夏色に染めていく

夏色の空気を
胸いっぱい吸いこんで
ほおずき色に変わっていく空を見上げる

もしかしたら
わたしの未来に今日と同じ明日はなくて
絶えることなく
何かが変化しているのだろう

そんな事を考えながら
似ていそうで違っている明日へ
わたしはは少しずつ進んでいく

優秀賞

新盆

西中学校二年

関 優介

八月に入ったら
祖母の家の玄関に
薄い青色のちようちんが
さがっている
祖母に聞いたら
新盆の家は
新しい仏様が
お盆で家に帰るとき
迷わず帰れるように
ちようちんをつるすのだと言う

三月に亡くなった祖父がお盆で帰ってきたら
何を話そうか
成績が悪かったから
おこられるかもしれないな

でも部活は
休まずやっているよ
少しはうまくなったよ
ぼくはそんなことを思いながら
線香に火をつけた

羽生市史

西中学校三年

田村 哲理

ぼくの家のじいちゃんは、今年八十歳
気がつくと椅子のうえで眠っている
ある日じいちゃんの机の上に
「羽生市史」という厚い本が置いてあった
興味をもって開いてみたら
ぼくの知らない昔々の
「羽生」がそこにあつた

じいちゃんは
羽生に生まれ、羽生で生きてきた
羽生にはまだ自動車が少なかった頃
車の修理をやっていたそうだ
石ころだらけのがたがた道を
自動車に乗って仕事場に通つたという
「羽生市史」には
じいちゃんの思い出がつまっている
一生懸命生きてきた
じいちゃんの足跡が残っている

ふつと思う
「羽生市史」は続いているんだ
ぼくの時代もこれからもずっと
ぼくも一生懸命生きて
足跡を残そう

じいちゃんの
しわだらけのごつつい手を見ていると
「史」という文字が重なる
いつもは体の自由がきかず
弱々しく見えていたじいちゃんが
何だか大きく見えていた

利根川

西中学校一年

萩原 ひかる

青い空と白い雲

一面に広がる緑の草たち

その向こうに 静かに流れる

利根の川

キラキラ キラキラ

太陽の光をあびて

静かに ゆっくり 流れてる

保育園のころ

ここはみんなの 散歩道

小さな足

必死で土手を上がると

大好きな利根川がむかえてくれた

小学生

毎年 春の利根川ハイキング

一年生も 六年生も

いっしょになって

利根川を感じてた

悲しいことがあると ここへ来る

空を見上げて 背伸びして

利根川から 風のおい

悩みなんて ちっぽけだ

心の中のとがったものが とけていく

やさしい気持ちに もどってる

いつか羽生を離れても

私はきつと ここにもどってくる

土手に立ち

大きくてやさしい利根川に

元気をもらう

明日もまた がんばれる

変わらないで

大好きな 利根川

ここで私を 見守っていて

佳作

ローカル電車

西中学校三年

一戸 玲美

学校のそばにある一本の線路
私の街を走るローカル電車
朝、駅からゆっくり走り始めた電車は
楽しそうな笑い声と元気いっぱいの人達を
乗せている
夕方、駅へとむかうゆっくり電車は
今日一日頑張った人達の疲れた体を
いたわる様に走っている
オレンジ色、シルバー
いろいろな色の車体が走る
どこかのテレビで頑張っている女の子の
顔がいっぱい描いてある車体もあったなあ
私の街を走るローカル電車
おしゃれじゃないけど私は好き。

風と一緒に

東中学校二年

岡戸 洸樹

田んぼの緑の上を
風が走っている。
ぼくもペダルに力を込めた。
自転車は重いなあ。
あの風は、あんなに軽やかに
楽しそうに
ぼくをおいて行ってしまった。
おい！
風、
お前と同じ速さで
走っていきたいぞ。
次の風と一緒に走ってみる。
次の風と一緒に走ってみる。
次の風と一緒に走ってみる。
次の風と一緒に走ってみる。

テニスと僕

南中学校一年

小澤 玲太

夏休み

朝からガラガラと太陽の日射しが
突き刺さる

「今日も暑くなるよ。」

と言いながら母が水筒を渡してくれた。
きれいに洗濯された青いユニホームに

着替えると、頭の中からつまずきまで
自然と気合が入る。

去年までの僕とは違う

今、僕はひとつのボールを追いかけている。

ただ、ボールを打つだけなのに

ラケットに当たる位置によってボールの行き先が
変わってしまう。

何度も何度もラケットを振って、
感覚を体に染み込ませる。

ただ、ボールを打つだけなのに
僕は、たくさんの人とかかわっている。

厳しく丁寧に指導して下さる先生
優しく楽しく教えてくれる先輩方

毎朝、「おはよう」と

声を掛けてくれるおばさん

真っ黒になったユニホームや体操着を

毎日、洗濯してくれる母

練習でへトへトになった僕に

かわいい笑顔を見せてくれる弟

今日もジリジリと照りつける日射しの下

学校へと自転車をこいでいると

配達途中の父の車にあった。

「プツプツ」とクラクションを鳴らし

手を振った父。

聞こえなかったけど

「がんばれ。」と言っているようだった。

暑い中・・・

父もがんばっている

僕も今、できることをがんばろう。

相手のコートにボールを打ち込むために

今日も練習する

ばあちゃんの梅干し

西中学校三年

芝田 智紀

小さい頃から
運動会や遠足のおにぎりに
必ず入っていた
ばあちゃんの梅干し
ばあちゃんの梅干しを食べると
不思議と頑張れた

ばあちゃんの梅干しは
小ぶりですっぱい
いつも、五個ぐらい
パクパク食べられちゃう
程よいすっぱさ

毎年じいちゃんが手入れした
梅の木の実で梅干しを作る
僕も父と収穫の手伝いをしたことがある
一つ一つ傷をつけないように
慎重に梅の実を取る
青い梅の実をバケツ一杯取ったら

汗がどっと出た
中腰で取っていたから
腰がとても痛かった
ばあちゃん達もそうだったのかな

まだ硬く青い梅の実
このままでも食べられそうだった
よく洗ってから塩漬けし
天日に干して作る梅干し
うちのばあちゃんは
塩漬けのときに、焼酎を入れる
すると僕の好きな梅干しになるのだ

いつも優しいばあちゃん、
いつものまにか、見下ろすようになった僕
「ばあちゃん、いつまでも元気で
長生きして、また梅干しを作って下さい」
今度会ったらそう言おうと
心に決めた

近くにあった幸せ

東中学校二年

須貝 奈々美

テスト前、気の重い帰り道
友達との話の話題もテストのことだった
しばらくして友達と別れて一人になる
ため息をついてふと横を見ると、空き地
いつも通っている所なのに、
気づかなかった
そこにたくさんの花が咲いていたことを
たんぽぽ、ナズナ、何よりつくしが多く
どれも華やかに咲き乱れていた
ああ、私はこんなに美しい光景にも
気づかなかったんだ
私は成長するにつれ、時が経つにつれ、
周りの物には、目を向けなくなっていた
それを、こんなカタチで
見つめ直すことになるなんて思わなかった
きつと、ここに住んでいなければ
気づかなかっただろう
いつの間にか、心がスッキリしていた

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
十五回目の夏	東中学校 三年	大木 陽介
自然	東中学校 三年	大手 祐輝
夏の日の一日	南中学校 三年	川野邊 栞
田んぼ	東中学校 一年	木村 留理
夏の日の帰り道	西中学校 二年	関口 真史
河原のできごと	西中学校 二年	永橋 美保
ふるさとの道	東中学校 二年	中村 悠希
魔法の言葉	西中学校 一年	蓮見 世奈
家族は宝物	西中学校 一年	濱屋 かな